

とつかのかんだちあと 鳥墓神庖跡

葦村集落の東側の小高い丘の上に鳥墓神社があります。ここには11代目垂仁天皇の御杖代である倭姫命によって、伊勢市の五十鈴川の川上に天照大神をお祀りする神宮の場所を定めた時に、神宮の運営などを担う役所＝「神庖」が置かれたと言われています。

伊勢神宮の内宮が朝廷に対して、平安時代に提出した『皇大神宮儀式帳』には「有爾鳥墓村造神庖」という記載が見られます。現在、葦村と呼ばれている地域は、江戸時代までは「鳥墓村」と呼ばれており、神宮側の史料内容と地名が一致することから、葦村に神庖があった可能性があると、町の指定文化財になっています。

神庖の具体的な場所や機能はまだわからないことが多いです。しかし、鳥墓神社の東隣には神宮で使用される素焼きの土器を製作する「神宮土器調製所」があり、かつては葦村の家で土器を作り奉納されており、神宮との関わりが深い地域です。さらに、鳥墓神社から北西約1kmにある北野遺跡では、古墳時代～奈良時代にかけて、素焼きの土器（土師器）を大規模に生産し、神宮や斎宮に供給していた可能性があることが分かってきました。

今後、斎宮だけでなく神庖の場所や役割についても解明が進み、明和町と伊勢神宮の深く長い関係がより詳しくわかってくることが期待されます。



鳥墓神社



神庖を伝える石碑



北野遺跡で見つかった土器を焼く遺構（土師器焼成土坑）



葦村の個人宅で神宮土器がつくられていた（昭和8年（1933）頃 大西源一氏撮影）